

緑 ネット通信 No.71

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は「みどり」、特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携し、その輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

松戸の里やま活動に 第1回 ちば里山大賞！

松戸里やま応援団 野口 功



松戸里やま応援団が松戸市みどりと花の課と共同で応募した【里やまボランティア入門講座から里やま活動への展開】が、第1回「ちば里山アワード」で「ちば里山大賞」を受賞しました。

ちば里山アワードは、『他の模範となるような優れた活動や里山の魅力を創造する先駆的な活動を表彰し、(中略)里山活動団体が活性化し、県内の里山の整備・保全に資すること』(実施要項)を目的として、千葉県が募集したもの。『市民・行政が協働して里やまボランティアの育成を行う県内初の事例で、同様の取組が近隣の市町村にも広まっている。』(県森林課の発表資料)として、最優秀の表彰となりました。

2003年から里やまボランティア入門講座を始めた先駆性と、その後の持続的な開催の取組が評価されたのだと思います。いくつかのマスコミで報道され、県のガイドブックにも松戸の活動が掲載されることとなります。松戸の樹林地を整備・保全し、活かす多くの方々の

ご尽力に感謝いたします。

実は、募集の案内を受けた時は、松戸の里やまなんて小さなものだし、もっと大規模に多彩な活動をしている里山があるだろうと思って、あまり乗り気になりませんでした。でも、“松戸の講座は独自性があるし、毎年のように新たな里やま活動団体が生まれているのは稀有なことだよ、”という指摘があり、森での活動の姿とは視点を変えた応募をすることになりました。

応募では二つのことを強調しました。

一つは、講座を修了して里やま活動をしている市民が、講座の企画・運営の中心を担っていることです。

講座の内容もオリジナルで、知識・技術よりも、現状を知り、自分がどうかかわれるかを考えることを主眼にしてきました。もう一つは、市内のすべての里やま活動団体が、緊密に連携して活動していることです。一見、何でもないことのようにですが、市外のいくつかの団体や行政との交流のなかで、なかなかそうはなっていないなということを実感しています。

松戸の里やま活動は着実に前進してきましたが、十数年の活動を経て、高齢化やまとまった樹林地が残りに少なくなっていることなど、曲がり角を迎えています。これまでの成果をいかしつつ、それにとどまることなく、新たな歩みを模索していかなければならないと思います。

《付記》9月25日(土)、松戸市民劇場で、「ちば里山大賞受賞記念講演会(仮称)」を開催する予定です。魅力ある企画のアイデアを是非お寄せください。



応援団主催で、すべての会対象の講習会が実施され、みんなで協力してのイベントも企画される。写真は2019年伐倒安全講習

拝見！ とよりの里山活動【柏市編その1】

松戸にはない 広域な森の維持を手がける団体に 特色あり

緑のネットワーク・まつと 高橋 盛男

松戸の近隣市の市民ボランティアによる里山活動(樹林地の保全活動)を訪ねるシリーズ。今回は、柏市を取り上げます。

3つのタイプの里山活動

現在、柏市の山林面積は11,490haで、全市域の8.5%を占めます。松戸市の山林面積はおよそ153haで全市域の約2.5%(山林以外の樹木・樹林を含む樹林地面積は約981haで全体の16% H28年調査段階)ですから、両市の緑地の広さには各段の差があります。

これには、2005年の柏市・沼南町合併により、山林面積が増大したという背景があるのですが、それでもこの30年間に約4ポイント減少しているそうです。

柏市の里山活動は、この市町合併の時期から本格化していきませんが、大きく3つのタイプに分けられそうです。1つは、自然環境の保護運動からスタートした活動。これは合併以前から続いているもので「下田の杜里山フォーラム」「こんぶくろ池自然の森」「ちば里山トラスト」がこれに当たります。

2つめが国の森林施業制度等を活用し、林業的な山林整備を主とする活動で、これは「手賀沼森友会」の1団体のみ。3つめは、柏市独自の「カシニワ制度」の助成を受けている活動で、同市が2006年に開講した「里山ボランティア入門講座」の修了者による団体を主として20団体余りを数えます。加えて、一部の山林



同会が管理する「ニッカの森」での自然観察会

所有者による団体「かしわ里山の会」があります。

1つめは、松戸でいえば関さんの森タイプ。3つめのタイプは、講座修了者に市がフィールドを斡旋し、団体を立ち上げるというもので、プロセスは多少違いますが、フィールドの規模や活動の様態も松戸に似ています。2つめの「手賀沼森友会」の活動は、松戸にはないタイプ、というより全国的にも珍しい取り組みです。少しこれに焦点を当ててみましょう。

面積50ha、100カ所を整備する手賀沼森友会

手賀沼森友会は、名称にあるように手賀沼の南岸流域の山林を良好に保ち、次世代へ引き継ぐことを目的とする団体です。現在、整備を手がけている山林の面積は、我孫子市の一部の森を含めて約50haで、およそ100カ所におよんでいます。

「荒れた森を放っておけないと思って始めた」という同会元代表の保田行弘さん。「しかし、これほどの規模になると、当初は思いもしなかった」そうです。同会の設立は2006年ですが、活動はその2年ほど前から。

「森に対する意識や整備の需要を調査したのが最初。山林所有者、地域住民、町会・学校・地区社協などにヒアリングしました。そのうえで、2005年に森林整備講座を開いて、その有志で翌年に立ち上げたのが手賀沼森友会。2011年にNPO法人化しました」

もちろん、初めは2~3カ所の森を整備する小さな活動でした。しかし、緑の保護に積極的な市議の所有者への働きかけや、特に助成制度の活用などについて



手賀沼森友会の設立からかかわってきた保田行弘さん



本格的な間伐も行う(逆井の浅間神社裏)

は県東葛事務所の職員の助言・協力もあり、規模が拡大していきました。整備の対象はすべて民有林。現在、75名いる所有者と協定を結んでいます。

同会の会員は、設立当初からそう多くはなく、今も20名程度。「頼まれたら拒まずに整備を受け入れている」とのこと。1カ所の森を概ね3年～5年周期で整備していますが、森が多くなるにつれ、考えたのは作業の効率。「効率化を図ろうとすれば、作業手順をき

ちんと組み立てて、それを皆で共有することになるので安全性も上がる」と保田さんはいいます。

資金調達と事業化は里山活動の課題

実はかつて、松戸でも森林施業制度の利用を検討したことがあります。しかし、助成要件に見合うまとまった樹林地がないことや、林業的整備が生物多様性の面から、小規模な都市林にはふさわしくないのではないか、といった理由で見送られた経緯があります。

しかし、同会の見どころは、さまざまな助成制度を積極的に利用して資金調達をしてきていること、そしてボランティア活動でありながら、活動を事業化していることです。活動の資金調達と事業化は、松戸に限らず里山活動の大きな課題。同会の取り組みは、その1つのモデルとして注目されます。

さて、柏市の里山活動で、もうひとつ注目したいものに、前出の「カシニワ制度」があります。今回はその仕組みや現状と併せ、森林環境譲与税への同市里山団体の対応についても見ていきます。

「里やま入門講座 2020」を振り返って

松戸里やま応援団 14 期 甚左衛門の森の会 金井康郎

新型コロナの感染拡大のなか、準備会議では「こんな状況で応募者があるのか」、「いっそ中止すべきだ」との意見も出ましたが、3密回避をはじめ感染予防対策に配慮しつつ、従来の講座内容に様々な変更を加えて2020年度の「里やま入門講座」はスタートしました。

募集を開始してみると、予想を大きく上回る30名以上の方から応募があり、13名の受講生を抽選で選ばざるを得ませんでした。その結果、男女比はほぼ半々、幅広い年代層の方に受講して戴くことになりました。

5日間の講座は好天にも恵まれ、受講生の満足度も高かったと感じました。特に4日目の受講者個人での森訪問は好評で、“松戸にこんな森があったことを知らなかった” “森の保全は予想以上に大変なことだ” “ボランティアの方が皆元気で、生き活きと活動している姿に

元気もらった”など、様々な驚きや気づきがあったようです。

また、今回抽選に漏れた方に向けては、囲いやまの森で「1日里やま体験」を実施しました。こちらには12名の方が参加され、講義と竹工作を通じて里やま活動の一端を体験し、森での一日を楽しんで戴くことができました。

講座を修了した13名の18期生は、今後も定期的集まりをもって、活動を継続していくとのことです。里やま応援団の仲間として、一緒に活動できる日を楽しみにしています。

最後に、「里やま講座 2020」にご協力戴いた皆さまには、改めて感謝とお礼を申し上げます。



緑のネットワーク情報

緊急事態宣言により、活動やイベントの中止も多かったようでした。

12月13日 野うさぎの森で“まつど*あそびラボ”のイベント。“森の概要説明”“森の案内”“キッズエリア”での遊び時間。



12月26日 秋山の森で、Save The Green@Akiyama (STGA)と松戸里やま応援団の協働による植樹作業が行われた。STGAは、秋山の森で主に親子向けのイベントを開催している団体。その傍ら森の維持・管理活動も手伝っている。同会の定例会にあたるこの日は、主要メンバー親子が参加。植樹地は、近隣からの苦情でケヤキが伐採された国道464号線沿い。高木にならず、道路から季節の花が楽しめるアジサイなどが植えられた。



12月27日 野うさぎの森 以前来森した東松戸小の児童からのリクエストに応じて親子を受け入れた。

1月13日再発見ツアー 緊急事態宣言のため中止

1月17日 みなみの森で子どもとまつどの体験教室「森であそぼう！」が開催された。



3月8日ナラ枯れ講習会
(2月1日の予定が延期)

..... 総会のお知らせ

例年5月に総会を開催しておりますが、今年度は新型コロナ禍のため、会員が集合しての総会を見合わせます。運営委員会で事業・会計報告、事業計画・予算等を審議し、総会といたしますので、ご意見のある方は3月末までにご連絡ください。なお、総会報告は次号で行います。
代表：藤田隆

～しぜんのコラム 47～

千駄堀池にオオハクチョウ

昨年(2020年)11月下旬～12月上旬にかけて、千駄堀池にオオハクチョウ1家族8羽が飛来した。この家族は、千駄堀池の北奥をねぐらとしていたようで、昼間は余所に採餌に出かけることが多かった。

下の写真は、オオハクチョウ一家が飛び立つところ。オオハクチョウは重いので、カモ類のように垂直に飛び立つことはできない。この日は北風が吹いていたので、一家は千駄堀池の南端まで移動し、風上に向かって水面を走りながら離水。徐々に高度をあげて池の北端でUターンし、南方向に飛び去った。

その後、8羽は姿を消したが、年明け1月下旬からは2羽のオオハクチョウが飛来。公園を訪れる人たちを楽しませている。



2020.12.3 オオハクチョウの飛び立ち (21世紀の森と広場)

ところで、現在、21世紀の森と広場では遊具作りの工事がおこなわれ、斜面林を伐ってジャンボスベリ台も作られる。これは「松戸市都市公園整備活用推進委員会」の1期中間答申がもとになっている。現在、2期目の検討がはじまっているが、民間事業者等との連携などが諮問されており、市の案では2022年度に事業者の募集・選定をおこなうとなっている。

一方、千駄堀池では昨年夏、“かいぼり”により外来種の一部が駆除された。公園の理念は「千駄堀の自然を守り育てる」だから、“かいぼり”でバランスをとりながら、千駄堀の木を伐り草を刈り遊具を作っているように、私には思えてならない。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー54(観察学習会 73) 新型コロナウイルスの感染状況次第で中止になることもあります

「新緑の森をつないで 松戸・市川 しざかい散歩」

野草の花にも出逢えるコースを歩きながら、身近なみどりについて一緒に考えましょう

4月21日(水) 9:30~12:30 (小雨実施)

集合 JR 東松戸駅改札口 9:30 (解散 JR 市川大野駅 12:30 予定) 参加費 300円 (会員は 100円)
申し込み 4月15日受付開始 (申込先 090-4078-3703 藤田 18時以降) 先着 20名
持ち物等 マスク、飲み物、雨具、手指消毒品。歩きやすい服装で。